

基本概念を手がかりにした 中等家庭科教育の内容の範囲と系統性

—ペンシルバニア州教育省案の紹介と評価—

加 地 芳 子・岸 田 蘭 子*・浜 名 麗 子
田 中 利 絵**・速 水 多佳子***・若 松 満知子

Scope and Sequence of Study Contents in Junior and Senior
High School Home Economics Education Based on Basic Concepts
—Introduction and Evaluation of Pennsylvania State Study Guideline—

Yoshiko KAJI, Ranko KISHIDA, Reiko HAMANA,
Rie TANAKA, Takako HAYAMI and Michiko WAKAMATSU

Received May 7, 1996

抄 録： 家庭科教育のカリキュラムを論じる場合、小・中・高校での内容の系統性が一貫していないことが問題となる。本論文では、教育内容の重複や欠落を防ぎ、内容の順序性を明確にするために、基本概念を3レベルに位置づけたペンシルバニア州教育省案の特徴を検討した。このように基本概念に従って内容を示す方法は、内容を構造的に把握することができるので、学習者の条件に適した学習内容をプランしやすい。

ペンシルバニア案の内容は、現代社会や人間の本質との関係を考慮しながら、日常の家庭生活がどのように行われるべきかについて、具体的な着眼点を述べている。

索引語： 家庭科教育，基本概念，系統性，範囲

Abstract： A discussion point in the curriculum of Japanese home economics education is the lack of study content coherence between elementary, junior high, and senior high schools. It is our concern to avoid overlaps and insufficiencies in study contents and to

註) * 京都教育大学附属京都小学校

** 聖母学院小学校

*** 尼崎市立城内高等学校

clarify the content sequence. This paper studies the Pennsylvania State Study Guideline that sets three levels in basic concepts. Since presenting study contents in order according to basic concepts promotes our understanding of the structure of the contents, it is easy for us to plan study contents that are suitable for different learners' needs.

The guideline refers to concrete viewpoints in our daily family life, considering the relationships between family life and our society and human features.

Key Words : home economics education, basic concepts, sequence, scope

1. はじめに

現在、わが国の教育課程において、小・中・高校に家庭科教育が、位置づけられている。家庭科の学習対象である家庭生活や家族は、多面的な要素を持ち、しかもそれらが総合的に関連し合っているため、各学校段階における学習内容を順序立てて系統づけることが非常にむづかしい。また学習者の実態からみても、教材の区分を明確に示すことは困難である。特に家庭生活全体に関わる内容においては、総合的性格が強いため、内容の重複や欠落が問題になる。このような状態がなぜ生じるのであろうか。それは、伝統的に家庭科のカリキュラムを構成する時の発想が、内容主義であったからである。すなわち、家庭科の教材の内容そのものが、生活する上で必要不可欠な内容であるから、内容そのものを理解・獲得することが教育の最終目的とされてきた事情があった。すなわち、教材そのものが、重要な意味を持ったために、教材は学習のための適切な例であり、家庭生活や家族を学ぶための手段であるというとらえかたはされてこなかった傾向が強い¹⁾。

生活の具体的な現象に着目するのか、生活が提示するどの要素に着目するのかの差が、ここにはある。後者の場合、基本概念語を示して、それに対応した学習内容を位置づけることによって構成することが可能である。この例として、米国ペンシルバニア州教育省の“Scope and Sequence Home Economics Education”²⁾を取り上げることにした。基本概念およびそれに対応した学習内容の訳出を行った。そして同時に、それらがどのような意味を持つものかについて具体的に検討した。しかし、この内容の解釈については、ペンシルバニア州教育局のねらいに忠実であるというよりは、われわれの家庭科教育のビジョンとして、どのようにあってほしいかという発想が加味されたものとなっている。

2. ペンシルバニア案の概要について

まず、今回資料として取り上げたペンシルバニア教育省が発行している“Scope and Sequence Home Economics Education”について紹介しておく。本資料は、1984年に家庭科教育委員会によって示された家庭科指導計画で、各学校において生徒の実態に合わせて内容豊富な指導計画を立案できるように、指導計画の本質がどこにあるかを明示するために開発されたものである。

総合的なVocational Education（一般的には職業教育と訳出されるが、神が人間に与えた天職と解釈する立場もあり、この立場を取れば、人間として生きていくための基本的生活力を育成する教養教育と理解することができる。従ってCareer Educationが、我が国の職業教育の概念

に対応する)としての家庭科の指導計画である。最低限2年間連続して学ぶためのカリキュラムとして計画されている。

この家庭科指導計画の構成は、まず教育課程が3レベル(レベルは学年に対応するのではなくて、家庭科を何年間学んだかという学習経験に対応するものである。)に段階分けされ、レベル毎に基本概念を示しているが、これらは、5領域(具体的には食物と栄養、人間発達と人間関係、経営とコンシューマリズム、住居・家具と設備、織物と被服である。この5項目は下位概念を示す用語としても使われている)に分けて示されている(表1)。さらに各レベル別にそれぞれの領域の内容が図表(表2～表6)に整理されているが、内容を示す用語は基本概念と下位概念に対応した形で記述してある。最後に、これら各領域における基本概念が教育全体から見たとき本質的な教育の目標(12項目)とどのように関係しているかを図表(表7～表9)で示している。この本質的目標は、米国の教育者によって確認されたもので、各領域で学習した結果として獲得されることが期待される広範な目標である。

3. 基本概念

上記の家庭科指導計画の構成で述べたように、家庭科の教科内容を示す基本概念は、3レベルに分けて示されている。まず、各レベルの基準がどのように位置づけられているかについて述べておく。レベル1は、個人に焦点が当てられ、ここで扱われる概念は生徒が初めて家庭科に触れた時、いつでも対応できるものだという立場に立っている。レベル2は、特に家族の一員としての個人に焦点が当てられ、レベル3は、個人として、家族の一員として、家族を取り巻く地域社会の一員としての事柄に焦点が当てられている。生徒は成長するにつれて、さまざまな概念をしっかりとらえていくことができる。それと同時に、経験もまた、広がり発展していくように配慮されている。学習指導計画は、レベル1からレベル3へと段階を踏んで学習するように計画されており、レベルの進展について、生徒が成長・発達するように作成されている。

表1は、各レベルのねらいを基本概念によって示したもので、領域別に3～7の概念があげられている。家庭科の指導計画は、家庭や家族生活の改善を導くために、5領域の相互関係を熟考して立てられるべきであることが意図されている。内容の総合性が、ここから読み取れる。そこで、これら5領域のそれぞれが、どのように考えられているかについてみてみたい。

「食物と栄養」領域；この領域は栄養摂取の原理を個々人が理解するために準備されている。健康や幸福と栄養との関係、食物の選択・食べるための準備・用意、個人と家族の必要としている食物と生活様式に合った食事の取り扱い、経済的・生態学的によいバランス、そして最適な食費の利用などが目指されている。レベル3になると「食事」の概念が無くなっているが、他の概念は各レベルで取り上げられている。

「人間発達と人間関係」領域；この領域は家庭内と他の人々との人間関係の性質、機能、意義を個々に理解するために用意されている。それはさまざまな家族の生活状況における教育、関係の確立と持続、結婚、親であること、家族生活の準備を含む。ここでは家族と個人とのかけがえのなさ、個人の発達と社会化、個人・家族員の欲求と興味の一致等について学ぶ。この領域は、他の人との関係を学ぶものであるが、まず、はじめに、自分自身について認識する「自己概念」を重視している。その上に立って、「人間関係」・「コミュニケーション」などの関係性が展開されるのであるが、どのように展開していくかを決定するものとしての「意思決定」などが挙げ

表1 レベル別基本概念

領域（標準指導時間） レベル	食物と栄養 （25時間）	人間発達と 人間関係 （25時間）	経営と コンシューマリズム （25時間）	住まい・ 家具と設備 （20時間）	織物と被服 （25時間）
レベルⅠ 生徒個人に関する概念 最低120時間	栄養 調理 コンシューマリズム 食事 安全性	自己概念 人間関係 意思決定 コミュニケーション 子どもの発達 職業	資源 意思決定 コンシューマリズム	安全性 設備や家具 居住空間 エネルギー 科学技術 職業	安全性 選択と手入れ 基本的構成 職業
レベルⅡ 生徒個人に関わる概念と家族の一員としての生徒に関わる概念 最低120時間	栄養 調理 コンシューマリズム 食事 安全性	自己概念 人間関係 意思決定 親になること 子どもの発達 コミュニケーション 職業	資源 意思決定 コンシューマリズム	安全性 居住空間 設備や家具 省エネルギー 科学技術 職業	安全性 コンシューマリズム 被服管理 織物 構成
レベルⅢ 個人、家族の一員、社会の一員としての生徒に関わる概念 最低120時間	栄養 調理 コンシューマリズム 安全性	意思決定 人間関係 親になること コミュニケーション 子どもの発達 職業 自己概念	資源 意思決定 コンシューマリズム	居住空間 コミュニティ 家具 省エネルギー 科学技術 職業	安全性 職業 被服 織物 コンシューマリズム 被服構成

られる。人間関係の基本としての親子関係は、レベル2以降に「親になること」として加えられている。

「経営とコンシューマリズム」の領域；これは、価値や、必要と欲求、目的、そして資源管理を理解する分野である。合理的な決定を下したり、満足できる家庭や家族の暮らしの建設や維持について理解する個人となることでもある。それには、予算の立案、投資、信用、消費者の権利と責任、家庭建設者と家計負担者との役割をうまく結びつける意味において、家庭での活動の組織化も含んでいる。家庭や家族の暮らしにとっての「資源」とは何か、その資源の運用において何を基準において「意思決定」するか、またその決定の方向性を示す指標として「コンシューマリズム」の立場に立つことが求められている。

「住まい・家具と設備」の領域；この分野は、望ましい住まいの環境を創造するための肉体的・精神的・社会的影響について理解することのできる個人を育てることをねらっている。それには、住居の形式や様式、住居の様々なタイプ、費用、外観設計およびインテリア、個人や家族の必要にあった住まいの空間を改善するための準備や、家の家具の選択に影響を与える人的・環境的要因に関する指導も含んでいる。住空間の「安全性」・「空間把握」や「家具・設備」という身近

な問題から、レベル3になると「コミュニティー」における関係というように広がりが出てくる。生活と「科学技術」や「エネルギー」との関わりについても取り上げられている。

「織物と被服」の領域；この分野は、被服や布の社会的・心理的・生理的側面などを理解させるものである。それは被服と繊維製品の使用と取得であったり、被服や繊維製品の選択、構成、手入れ、リフォームであったりする。被服や織物の生産のみならず、消費者としての個人や家族が行う選択の影響を含んでいる。まず被服と心身との関係において「安全性」の確保は基本となる。その上に立って「選択」・「手入れ」という日常生活場面が問題になるが、一方では「コンシューマリズム」など衣生活に対する姿勢が重要になる。また、同時に「織物」・「被服構成」など被服そのものをより深く学ぶことが、衣生活への理解をより一層深めることになる。

4. 領域別にみた基本概念と内容

先に表1で示した基本概念が、どのような内容に対応するかについて、検討したい。ペンシルバニア案に示された関係表（表2～表6）の用語を訳出すると同時に、それぞれの用語がどのような意味をもつのか、また、この関係表から推論される学習内容を記述した。その際、レベル間での段階性についても検討を加えた。その結果を領域別に示すことにする。

1. 「食物と栄養」

表2は、「食物と栄養」領域の内容を基本概念に対応して示したものである。

〈栄養〉

基本的な栄養の知識は、レベルⅠにおいて扱われている。生徒個人の食生活と関わって人間にとって必要な栄養素とはどのようなものか、どのような食物からどのような栄養が供給されるか、そしてどのような食物を選ぶとよいかなどに触れている。また間食の採り方や、摂食障害による栄養失調など望ましい食生活のあり方が示唆されている。食生活は、人間発達の面からみて、個人の暮らしぶりが反映され、自分の食生活を自分自身でどのように認識するかということがいかに重要であるかということが内容として取り上げられる。食生活は、人間の外見にも影響を及ぼすこともあげられている。一方、自分で食生活を営んでいく上で、必要な内容として、食事の用意に必要な予算の立て方や、どれくらいの費用が必要なのか、実際どんな食物がどれくらい消費されているか、生産から消費までのしくみ、品物の選び方、購入するときの情報としてどのようなものが利用できるか、といった消費者教育的内容が扱われている。

レベルⅡになると、栄養の知識は、原理や機能というように専門的に発展して深められる。ここでは、家族の食生活を考えていく上で大切なことが学習の中心となり、家族員に合った食生活が行えるように、消化の仕方や、特殊な体質の人が必要とする栄養や欠乏症、食物による感染などが取り上げられている。食生活の経営でも、特殊な年齢の人や体質の人のための手引きや減量の仕方、買い物の仕方などを学ぶ。

レベルⅢでは、食生活の視野を広げて、社会問題として取り上げられているような話題が学習の中で取り上げられている。食生活の中でも栄養に関する考えにどんな流行があるのか、そこに問題点がないかを考える。食生活は人間の健康に大きく影響を及ぼすことは、レベルⅠでも取り上げられていたが、特に、Ⅲでは、社会を背景とした拒食症や過食症といった摂食障害の問題など、食べることに関する病気について学習する。また、国民の健康状態ともからめて、政府がど

表2 食物と栄養(25時間)

	基本概念	食物と栄養	人間発達と人間関係	経営とコンシューマリズム	住まい・家具と設備	織物と被服
レベルⅠ	栄養	基礎的栄養素 供給源 必要性 選択 間食 栄養失調	自己概念 エネルギー 外見 経験 ¹⁾	基礎的食品群 費用 予算 食物消費高 ²⁾ 食物資源 ³⁾		
	調理	調理の原理 保存 (貯蔵・保管)	世話	量 調理法 時間 エネルギー インスタント食品	基礎的設備 小型の調理用具	
	コンシューマリズム	食物計画	価値観	買い物 単位量あたりの値段 表示	設備の選択	
	食事	美味 盛りつけ量	マナー	ファーストフード	テーブルセッティング	リネン類
	安全性	公衆衛生 保存	世話		用具の使用	
レベルⅡ	栄養	原理(成分) 機能	消化 ⁶⁾ 特別な必要性 ⁶⁾ 欠乏症 ⁷⁾ 感染力 ⁸⁾	食事の手引き 体重制限(減量) 買い物		
	調理	調理の原理 ⁹⁾ 味付け	特別な行事 経験性	代用品 ¹⁰⁾ 同等品 ¹¹⁾ サービスの仕方	特別な装備 よく使う主な道具	
	コンシューマリズム	有効性 有機栽培 食糧資源 ¹²⁾ 添加物	価値観	広告		
	食事	つけ合わせ	おもてなし ¹³⁾		テーブルの飾り付け	テーブルの飾り付け
	安全性	汚染防止				
レベルⅢ	栄養	流行 まちがった考え	健康 食べることに関連した病気 ¹⁴⁾	政府の食糧計画		
	調理	発展した調理技術 郷土食			マイクロ波加熱調理器	
	コンシューマリズム	食べ物のサイクル これからの食生活	価値観	政府・州・地方の働きかけ ¹⁵⁾ 環境 規則		
	安全性			政府・州・地方の働きかけ ¹⁶⁾		

1) その人がどんな暮らし方をしてきたか

2)どれだけどんな食物が消費されているか

3) 生産から消費まで、流通と食品の鮮度の問題なども含めて

4) 食欲を促すおいしそうな食事

5) 6) 7) 8) 家族の食生活を考えていく上で大切なことが含まれている

9) レベルⅠの発展的内容で、より高度で特殊な調理法について、その原理

10) コピー商品なども含めて応用的に汎用できるもの

11) 役割や価格が同じに等しいもの 商品知識として知っておく

12) 消費者主義的な食糧資源の見方 例えば、捕る漁業と育てる漁業を資源の面から比較

13) ホームパーティなど人をもてなすサービスの仕方

14) 社会的状況を背景とした拒食症や過食症などの病気

15) 食生活に関する消費者問題について行政がどのように働きかけたか

16) 食品の安全基準の設置など

のような食糧計画をたてているのかという視野からも栄養について発展的な学習をしているのがわかる。

〈調理〉

調理の原理については、レベルⅠからⅢへと発展的に扱われ、Ⅰでは、食品を扱う上で、食品の特性を知るという意味で最も基本的な食品の保存（貯蔵・保管）の仕方、Ⅱでは、食品の味付けの仕方を学習し、さらにⅢでは、発展した調理として、郷土食を扱っている。

レベルⅠでは、調理をして料理を作るということは、人に対して世話をする（気づかたり、心を配る）ということであるというように調理という仕事人間発達にもたらす意義を押さえている。また、消費の面からは、調理時の食材の量や調理法による時間やエネルギーの消費の仕方、インスタント食品の特性や使い方も内容として取り上げられている。調理時に使う基礎的な設備や小型の調理用具の種類と使い方についてはここで学習する。

レベルⅡでは、それぞれの家庭で行われる特別な行事（宗教的な行事や、家族の記念日など）とからめた食事やそれぞれの家庭によつての食事のスタイルがあることへと視野を広げる。また、消費の面からは、レシピの応用がきくように代用品としてどのような物が考えられるか、役割や価格が同じ品物を商品知識として知っておくことが取り上げられている。調理時に使う装備や道具は、Ⅰから発展して、オーブンやレンジなども含めて特別な装備やよく活用する主な道具の使い方をマスターする。

レベルⅢになると、さらに発展した調理を行うことにもなつて、調理に使う機器もマイクロ波加熱調理器のように特殊な道具を扱うことになる。

〈コンシューマリズム〉

レベルⅠでは、食生活を営む消費者の基本として、食生活の計画の立て方について学ぶ。Ⅱでは、より具体的に食生活のあり方を問い直していくために、有機栽培や食糧資源の問題、添加物の問題を取り上げて学習する。さらに、Ⅲにおいては、より大きな視野から、われわれの食生活を問い直し、食物がどのようなサイクルで循環し、どのような問題を引き起こしているのかを考える。地球規模で考えた場合、食糧の生産と消費のバランス、輸出入食品の問題、ゴミの問題など話題はつきない。当然一方では、個人レベルの問題から、食に関わる政策など社会レベルの問題へと、学習問題は発展していく。また、どのような食生活の価値観をもつかということが、いかに人間発達や人間関係に影響を及ぼすかについては、レベルⅠ～Ⅲを通して学ぶ。それだけ大きな学習課題であるともいえよう。具体的な消費生活にかかわっては、レベルⅠでは、買い物の仕方として、単位量あたりの値段がつけられているものの買い方、表示の仕方からはいる。食生活に関する消費行動は、食糧だけでなく、厨房の設備の選択なども含まれる。

〈食事〉

ここでいう食事は、いかに人間らしい豊かな食生活を営むかという意味で基本概念のひとつとしてあげられ、レベルⅠとⅡで扱われている。食事を楽しく豊かにするための学習である。レベルⅠでは、調理に関わつて、食欲をそそるような食事とはどのような食事か、もりつけの仕方を学ぶ。また、基本的なテーブルセッティングの仕方や、それに用いるリネン類の選び方、食事のマナーが内容にあげられる。これらは、個人の素養として必要なことがらである。

レベルⅡでは、つけ合わせを考えたり、ホームパーティーなど人をもてなすサービスの仕方やテーブルの飾り付け方が取り上げられている。かなり社交的に、家族の一員として人と接することを想定しての内容である。

〈安全性〉

レベルⅠでは、基本的な調理と関連して、食中毒など起こさないための公衆衛生のあり方や、食品の保存の仕方を中心に注意すべきことを学習する。また、火傷や怪我などの事故がないよう調理設備や用具の使用についても十分配慮して学習する。

レベルⅡでは、コンシューマリズムで取り上げられていた添加物や有機農法などにかからず、食汚染をどのようにして防止していくかという点に焦点をあてたり、レベルⅢでは、社会的に安全性の問題をどう考えるかという点から、政府や州や地方がどのような環境にあり、どのような法的規制をかけていっているのかというところまで、発展させて考えさせようとしている。

2. 「人間発達と人間関係」

表3は、「人間発達と人間関係」領域の内容を基本概念に対応して示したものである。

〈自己概念〉

自分自身の認識を左右する概念として定義される自己概念は、そのおおよそが個人的なレベルにおける認識によるものであるため、その対象となるレベルは個人のレベルであるレベルⅠとレベルⅡでそのほとんどが扱われている。

レベルⅠでは自己認識を左右する要素として個人の外見があげられている。個人の外見に影響するものには食事内容によるものであったり、着るものであったりするであろう。これはレベルⅡにおいても取り上げている。

レベルⅠにおいては、個性をとらえる要素として個人差と性差をあげているが、レベルⅡにおいてはそこに責任が加わることにレベルの発展性が見られる。

必要と欲求の項目は各レベルを通して取り上げられているが、それは対象が広がるに従って必要と欲求の支配層は変化するであろうし、その場に適したコントロールができるようになることが望ましいとされるからであろう。レベルⅠにおいては「必要」と「欲求」という2つが存在し、両者の意味の違いをまず知ることが基本となるであろう。そのうえでレベルⅡにおいては他者との関わりが生まれてくる中でどこまでを「必要」とし、どこからは「欲求」となるかといった支配層の変化に気づかせることに重点が置かれる。レベルⅢになればさらに変化が起こるであろう。様々なレベルや対象によって、「必要なもの」と「ほしいもの」は変化するものであるし、変化させることができるように、レベルの発展に伴って押さえていく項目である。

これらが自己外見の認識へとつながるものになるために、主体的な受けとめ方とそうでない受けとめ方をレベルⅠでは押さえておく。

〈人間関係〉

人は誰しも家族との関わりの中ですでに最初に人間関係を持つ。レベルⅠでは、家族という存在を考えさせ、その中でのそれぞれの役割についてとらえていく過程で、家族における自分をとらえさせようとしている。レベルⅡでは、年齢の変化に伴って家族の関係にも様々な変化が見られてくること、その中でどのようにあるべきかについて学習を発展させている。レベルⅢでは、家族間で起こるトラブルについて取り上げている。個人個人の存在が強くなり、各々がその存在を主張してくると様々な衝突が起こるものである。ここではトラブルそのものが悪いととらえさせるのではなく、トラブルに対してどのように対処するかといったことが重要となることを学ばせたい。

仲間であったり、友情の存在についてはレベルⅠで取り上げる。レベルⅡでは、家族と仲間と

表 3 人間発達と人間関係 (25時間)

	基本概念	食物と栄養	人間発達と人間関係	経営とコンシューマリズム	住まい・家具と設備	織物と被服
レベルⅠ	自己概念 ¹⁾	個人の外見 ²⁾	ストレス 発達 必要と欲求 感化／追従 ³⁾ 性差／個人差		個人の空間 ⁴⁾	個人の外見 ⁵⁾
	人間関係		家族の機能 家族における青年の役割 友情／仲間関係 性別役割の交替		個人の空間 ⁶⁾	
	意思決定		価値観の同定 ⁷⁾	目的設定 問題解決の供給源		
	コミュニケーション		形式／技能 自制 ⁸⁾			
	子どもの発達	子どもにとって基本的 に必要なもの及びこと ⁹⁾	保護者の役割と責任 子育ての準備(親になること)	玩具の選択	子どもの安全 玩具の選択	子どもにとって基本的 に必要なもの及びこと
	職業		自覚			
レベルⅡ	自己概念	自己概念 ¹¹⁾ 外見 ¹²⁾	要素 ¹³⁾ 必要と欲求 性差／責任 防衛規制	必要／欲求		自己イメージ ¹⁴⁾ 外見 ¹⁵⁾
	人間関係	食物の選択要因	関係の変化 仲間／家族 愛情／心酔 加齢	必要性の変化 目的達成のために 必要な優先順位 ライフサイクル ¹⁶⁾		自己表現
	意思決定	家族にとっての 必要性 ¹⁷⁾	原因と影響 対処の仕方	目的設定の過程 問題解決能力	環境にとっての必要性 ¹⁸⁾	
	親になること		社会的・性別的働きかけの重要性 ¹⁹⁾ 文化的・社会的仲間関係でのプレッシャー			
	子どもの発達	必要なもの 及びこと ²⁰⁾	発達の段階 身体的、精神的、感情的、社会的領域 ²¹⁾	必要なものや事	必要なものや事	必要なものや事
	コミュニケーション		技能の活用 ²²⁾ 唯一性 ²³⁾			
	職業		調査(探検) ²⁴⁾			
レベルⅢ	意思決定	価値観 選択	集団の相互作用 リーダーシップ 対処の仕方	価値形成の過程 個性 ²⁵⁾	価値 選択	価値 選択
	人間関係	ライフスタイル	成熟 家族の危機 家族間の衝突	ライフスタイル	ライフスタイル	ライフスタイル
	親になること	出生前の健康	生むことの決定 ²⁶⁾ 妊娠 妊娠に伴う二者択一 ²⁷⁾ 幼児虐待／放任 配慮が必要な子ども ²⁸⁾	家族計画 出生前の健康 ストレス 能力 ²⁹⁾		
	コミュニケーション		自己評価 ³⁰⁾ 人間形成の(間の)関係 ³¹⁾ 高度の科学技術の発達 ³²⁾			
	子どもの発達	必要条件 ³³⁾	いつくしみ ³⁴⁾ 責任ある態度の奨励	人的資源の管理 ³⁵⁾	設備の選択 ³⁶⁾	選択 ³⁷⁾
	職業		調査(探検)			
	自己概念		必要性／欲求の影響する層			

- 1) 自己認識。自分自身の認識を左右するものに対する概念。
- 2) 風采。食物摂取のあり方が外見に与える影響。
- 3) 周囲の状況などを主体的に受けとめることと主体のない受けとめ方。
- 4) プライバシー。自分と向き合うための空間。
- 5) 服装によって変わる自分をどうとらえるか。
- 6) 個人の空間を確保することが人間関係のあり方に与える影響。
- 7) 社会的な価値観を受容したり、一体化したりする。帰属意識を持つ。
- 8) 人間関係のなかでのセルフコントロール。自己主張しすぎない。
- 9) Needsなので必要なもの及びこと
- 10) この分野（人間発達と人間関係）に対応した、自分に対する認識を持つといった意味においての自覚
- 11) 食物・食事に対して自分の描くイメージ 自己像
- 12) 肉体に与える食物の影響による外見のこと
- 13) 自己概念を成り立たせているもの
- 14) Self-image=自己像 Self-concept=自己概念
- 15) 肉体に与える被服の影響
- 16) ライフステージにおける関わり及び影響の変化
このレベルⅡの段階では、ライフサイクルという概念を理解させるにとどまる
- 17) 食・食事に関しての必要性のこと
- 18) 住に関しての必要性のこと
- 19) ジェンダーのとらえ方によるsocialとsexualの概念上のsocialと同意
性的働きかけの重要性とは、父性と母性の両方が必要であるとの意
- 20) レベルⅢより、より具体的なレベルという意味で「ものやこと」とする
- 21) 社会的領域としては、テレビの与える影響などが考えられる
- 22) レベルⅠから発展させる ここでの技能とは、コミュニケーションに必要な技能（他人との関わり）の意
- 23) 家庭ごとのコミュニケーションにおける唯一性
独自性が人間発達に関わっているととらえている
- 24) レベルⅠを生かして、その上での探求をしよう、との意
(ex.どのような仕事だと生かせるであろうか)
- 25) その人なりの個性のある判断
- 26) 例えば生むか生まざるべきか、であるとか、妊娠するか避妊するかといったことの決定
- 27) 選択肢として具体的に考えられるのは、仕事・家族の意見など
- 28) 配慮が必要な子ども＝（障害児などに対する親としての対応）
- 29) 親になるための準備や段取りをManagementするための技能
つまり物質的、精神的、金銭的な面での生まれた後の環境設定のこと
- 30) この自己評価は、ここで3つの項目の中で最も重要な項目であるとして先に挙げてある
自分を知ることがまず基本であって、その上で自分をいかに相手に伝え、存在をアピールするかが考えられるべきである
コミュニケーションをする上で自己評価をしていき、その評価にしたがってコミュニケーションを考え直したり、やり直したり、役立てたりする
- 31) inter=間、相互
- 32) 高度な科学技術として考えられるのは、例えばFAX, INTERNET, 電子メールetc.これらのものが人間づきあいに与える影響のこと
- 33) レベルⅡよりも抽象的な意味において、食物・食事が子どもの発達に与える影響について
- 34) 愛情深く育てるという感情を強く含む
- 35) 経営という概念よりもより強い概念としての管理
経営だと経済的意味合いが強くだされるため、人的要素を含めるために管理の意を用いる
- 36) 子どもの発達にとって必要な、という意においての設備の選択
- 37) 子供の発達に適した衣服の選択・色彩・デザイン・材料・服装など

の違いをとらえさせると同時に、友情と愛情との違いについてもとらえさせようとしている。

ライフサイクル・スタイルという項目があるが、レベルⅡではライフステージにおいての関わり及び影響の変化といった概念的なものを理解させるにとどまり、レベルⅢで生活の全体的範囲の中で、さらに深めてとらえさせようとしている。

〈意思決定〉

意思決定において最終的な目的達成と考えられるのは、しっかりとした価値観をもち、それに従ってあらゆる場面においての選択が自分なりに行えるようになることである。そのための学習をレベルの上昇に伴って達成させていくのがここでの目標となる。

レベルⅠにおいては価値観の存在の有無を自覚することであったり、社会的に価値とみなされていることへの認識を持つこと、それを受け入れるか否かといった価値観に関すること。また、意思決定の目的をどこに持ってくるか、問題の解決のためにはどのような情報が必要であるのかといった意思決定の際に基礎となる事柄について押さえることに重点がおかれている。

レベルⅡにおいては、その意思決定を行っていく上での過程について取り上げている。何に原因があるのか、何に影響を受けているのか、どのような対処がふさわしいのか、そのために必要な能力はどのようなものであるか、などといったことである。

そのうえでレベルⅢにおいては、あらゆる場面においてのそれぞれの価値と、その選択について学習するとなっている。そこでは個性も表現されるであろうし、自分なりのその場に適した価値形成も行っていく必要が現れてくるであろう。さらに他者との関わりのなかでの相互作用についても認識を深めることで、人が生きていく上での意思決定の重要性を自覚させることもはずすことはできないものであろう。

〈親になること〉

レベルⅠには、この項目は設けられてはいない。関連した〈子どもの発達〉の項に、子育てや親の存在について学ぶ内容がある。ここで育てた認識について、さらに発展させて学ぶために、レベルⅡより項目が設けられている。

レベルⅡでは、親になるために必要な概念について押さえている。親となるためには、肉体的に大人となっていれば親となれるのではなく、精神的にも社会的にも自立した状態である必要があり、成熟した個人としての自立が重要となってくるのである。

その点を押さえた上でさらに起こってくる問題についてレベルⅢでは取り上げている。これらの問題を適切に受けとめ、対処していくことのできる個人を育成しながら人間としての成長を図っていく項目である。

〈コミュニケーション〉

この項目はより欧米的な色彩の現れているところである。特徴的な点としては、レベルⅠの「自制」である。人間関係のなかにおいては自己主張しすぎるのはよくないとの捉え方である。レベルⅠではコミュニケーションの形式や技能といった、基本概念について押さえ、レベルⅡにおいてはそこで習得した技能の活用が学習される。ここで言う技能とはもちろん他人との関わりの上で必要な技能である。レベルⅢではその更なる上位概念として他人との相互関係のなかでコミュニケーションを考えさせる内容となっている。

さらにコミュニケーションにはその独自性も重要であるとして、レベルⅢでは、自分個人をよく知ることによりよいコミュニケーションが行われるとし、自己評価の重要性について取り上げている。

〈子どもの発達〉

「子どもにとって基本的に必要なもの、及びこと」という項目が各レベルに従っておかれているが、レベルⅠにおいては、各領域でそれぞれに必要なものが存在するということに気付かせることに重点を置いている。レベルⅡにおいてはそれがさらに具体的な内容として取り上げられ、レベルⅢにおいては抽象的な概念として取り上げられている。

レベルⅠにおいては、基礎的な内容理解として、おもちゃの選択などに発達の過程が現れるものとして取り上げている。そのうえでレベルⅡにおいてはそのほかの様々な要因が子どもの発達にどのように影響するのかという視点から学習を行うとしている。その様々な内容の広がりによってレベルの発達を見ることができる。レベルⅢになると、より精神的な要素が強くなってきている。これは基礎的なことに対する知識を持った上で、さらにそれらの知識を生かすための思いを育てていく必要があるからであり、その愛情や意欲などの思いが人間を動かすといえるからであろう。

〈職業〉

この分野においては将来の見通しに立った職業に対しての知識を持ち、意識を高めさせようというねらいが見られる。それはひいては自分探しの教育にもつながるといえる。レベルⅠにおいてはまず自分に対する認識を持たせるという意味での「自覚」の項目がある。この部分が基礎としての要素をもつと考えられるからであろう。そしてレベルⅡ、Ⅲと進むに従っては、レベルⅠを基にした調査であったり、探求であったりをしていこうとされている。「どのような仕事だと自分の個性を生かしていけるのであろうか」といった視点からの導入であると考えられる。

3. 「経営とコンシューマリズム」

表4は、「経営とコンシューマリズム」領域の内容を基本概念に対応して示したものである。

〈資源〉

生活を営むことに関する資源となるものにどのようなものがあるのか、それをどのように利用すればより有効に生かした生活をするようになるのかについて学習する項目となっている。

レベルⅠにおいては、その資源として考えられるものに対する基礎的知識を理解することに最も重点を置いているといえる。また家庭の中においてどのような位置づけとなるかといった内容も含まれている。それは「家庭の維持」のためにも必要であるし、「活動計画」を立てることも見逃してはおけない点であろう。資源として物質的なものだけでなく、エネルギーや時間、そして人間の存在自体が資源としての意味を持つという立場に立っている。

レベルⅡは、レベルⅠにおいて学び理解した知識を生かした上で、その用途や、その効果についての考察を深めるべき段階と位置づけられている。そしてその資源を管理する手段として家庭用コンピュータを活用することも含まれる。

レベルⅢとなると対象が地域社会に広がるため、学習内容も社会的な位置づけの中での資源をとらえるようになっている。資源の視野の範囲は「地域社会」であったり、社会における「食料管理」にまで広げられている。また、資源としてとらえるものに、自分自身の存在自体を資源として考え、地域社会に対して自分の有用性について考えてみることや仕事の技術を資源ととらえることなど、社会を支える資源は広い意味で金銭やものだけではない。その観点に立って考えると、自己表現の手段としての“服装表現”もその人を写し出す方法とみることができる。従って服装を通して自己を表現することのできる能力、すなわち服装を自己と同一化できる能力もまた、その人が有している資源ととらえることができるのである。

表4 経営とコンシューマリズム (25時間)

	基本概念	食物と栄養	人間発達と人間関係	経営とコンシューマリズム	住まい・家具と設備	織物と被服
レベルⅠ	資源		人間 ¹⁾	供給源 はじめての作業 タイム・スケジュール 管理	家庭の維持 活動計画 エネルギーの管理	
	意思決定	選択	技能の対処の仕方 価値観	欲求対必要性 ²⁾ 価値観と目標の影響力 ³⁾ 結果		服装
	コンシューマリズム		プロシューマー ⁴⁾	欲求と必要性 ⁵⁾ 購入 影響 ⁶⁾ 政府規定 ⁷⁾		
レベルⅡ	資源			用途 効果	家庭用コンピュータ ⁸⁾	
	意思決定	食料の準備と購入	特殊な状況 ⁹⁾	技術 ¹⁰⁾	人的空間	
	コンシューマリズム			広告 ¹¹⁾ モノとサービス ¹²⁾ 買い物の技術 ¹³⁾	家庭での整備計画 ¹⁴⁾	
レベルⅢ	食料管理	地域社会 ¹⁵⁾	個人(自分) 仕事の記述 ¹⁶⁾ 金銭管理 収入/供給源/形式	独立の生計	同一性 ¹⁷⁾	
	意思決定	食事の計画 ¹⁸⁾ 栄養 節約 技術	責任 ¹⁹⁾ 危機管理 ²⁰⁾	職業の選択 金銭管理 予算 預金 投資 融資 保険 責任	生活空間の選択	衣類の計画 手入れ 修理
	コンシューマリズム	食物の選択 ²¹⁾ 買い物の練習 ²²⁾		情報/流行 ²³⁾ 利用価値のあるサービス 契約 ²⁴⁾ /保証 権利と責任	住まい方を代える工夫 家屋に関する財政 抵当 賃貸 保険 保全/修理 エネルギーの保存 ²⁵⁾	比較購入 ²⁶⁾ 衣服の選択

- 1) この分野(人間発達と人間関係)に対応した、自分に対する認識を持つといった意味においての自覚
- 2) 「欲求をもつ」ということと「必要性がある」ということの相違点が意思決定のあり方を左右する
- 3) 目標をどのように設定しているかによって意思決定の判断基準となる価値観のあり方が受ける影響について考える
- 4) 賢い消費者、の意味。生産と消費が一体化した状態。情報化社会を通じて消費者が自らの主張を貫くために生産に参加し、自らの製品を消費すること。Producer(生産者)とConsumer(消費者)からの合成語
- 5) 欲求と必要性に対して、消費者としてどのように対処すべきか
- 6) 消費者の行動を左右する各種の影響
- 7) 消費者の立場を守るために定められている法的規制
- 8) 資源の管理を家庭用コンピュータで行う
- 9) 人間関係がうまくいっていないなど特殊な状況に置かれた中での意思決定のあり方
- 10) 家族の生活のためにどのような技術を活用すればよいかを決定するための判断
- 11) 消費者主権の立場から広告のあり方や活用の仕方を見る
- 12) 自分の生活体系の中にもととサービスをどのようなプリンシプルで導入するのか
- 13) 消費者主権の立場を守るために技術として買い物の仕方をみた時、何が問題になるのか
- 14) 家庭で行う家屋の整備計画
- 15) 地域社会における人的関係を資源とみる
- 16) 仕事に関して得られた技術は、その人にとっては重要な資源となる
- 17) 自己表現の手段としての衣服は、自己との同一性を表明する手段であり、その手段を獲得することは資源を得たことになる
- 18) 食事の計画を決定する時その視点となるものが栄養・節約・技術
- 19) 自己の意思決定の結果が、他の人に対して与える影響に対して、自分が責任を負うことが当然必要となる。意思決定を行うことは、その結果に対する責任を自覚することが同時に求められる
- 20) 災害や非常事態が生じた場合に、人々の関係を配慮した上で、どのように調整していくかという中で行われる意思決定のあり方
- 21) コンシューマリズムの立場に立って、食物をどのように選択すべきかを学ぶ。自分の生活にとって、いかに有用な食物を選ぶかという視点だけでなく、自分の選択が資源問題や環境問題などのように消費をとりまく状況にいかなる影響を与えることになるかなどの配慮をふまえた選択をする
- 22) 理論的建て前の世界の中で食物の買い物をどうすべきかという学習をふまえて、現実的な場面で実際に買い物の練習をしてみる
有形無形の売り手から買い手に働きかけられる各種の商業主義的な影響の下で、消費者としての立場を貫いた買い物ができるための実践的、体験的な学習をする
- 23) 具体的な情報があり、それに基づいて行動したり判断したりすることと何となく成りゆきでそのような傾向になることとは異なるということ
- 24) 契約をして約束をするということと契約事項が真実保障されているということとは異なるということ
- 25) エネルギーロスを少なくした住まい方を配慮する
- 26) スーパーか専門店か、まとめ買いかシーズンオフか、流行の先端に買うかなど、購入のあり方を比較検討する

〈意思決定〉

経営とコンシューマリズムにおいて意思決定能力の育成は、必要不可欠の学習内容で、この領域においては、はずすことのできないものと考えられる。意思決定のために必要な知識、技能、その過程、対象となる分野などの習得をここでは学習目的としてとらえたい。レベルⅠにおいては、意思決定をする動機の根底になる、「欲求と必要性」をまずはじめにもってきている。「得たい」と感じるものには「欲求」に基づくものと必然的に「必要」性があるものとがあり、それらは区別して用いられなくてはならないという概念に気づかせる必要があるからであろう。さらにその違いは、各場面や各個人の個性及び価値観などによって生まれてくる場合もあるため、ここで「価値観」の学習内容が盛り込まれている。自分なりの価値観を誰もがもっているということやその価値観に従って行動を選択するとどのような結果が生まれるかといったこと、「目標と価値」とがどう関わるのかをレベルⅠにおいては基礎知識として学習させたり、どのような服装をするかという結果に至るためには各人が意思決定を行っているのだということを学ばせたいとしている。

レベルⅡにおいては、レベルⅠで押さえた知識理解を基に、例えば、人間関係がうまくいっていないなど特殊な状況の下でどのように意思決定を行えばよいのかなど、様々な状況下での行い方に触れさせている。その際技術をどのように扱うかの判断の仕方についても学習する。

さらにレベルⅢでは、衣食住に関する生活における具体的な場面において実際に意思決定を行わせたり、考えさせたりしながら、最終的な技能の習得を図ろうとしている。もちろん意思決定をする対象は、金銭的な面のみにとどまるのではなく、生活に関わるより広い事象に視野を広げることがここでは望ましいと思われる。そのためには災害などにおける危機管理を行う時に、人間関係に配慮しながらどのように対処していくべきかなども取り上げられている。職業選択に関わる意思決定についても、ここで扱うことになっている。

また、自分にとって最善の結論を得るために行われる意思決定の結果に対して、我々は責任を負う義務があるということを認識させることも必要である。

〈コンシューマリズム〉

消費主義といっても、自分の周辺における経済面中心の消費を指すのではなく、社会的事象としての広がりの中で、どのような消費行動ができる消費者であるべきなのか、といったことが学習できる分野である。消費者として、自己にとっての有益性に止まらず、自己をとりまく他との関係において、どのような消費者であるべきかを学ぶことが期待されている。この分野は情報の氾濫や、商品の洪水のなかで生きていかなければならない現代に生きる私たちにこそ、重要性の高まってきた分野であると考えられる。

どのような消費者であるべきなのか、何をもって賢い消費者といえるのかといった知識は、基礎的知識とここでは考えられる。それらはレベルⅠを中心に取り上げられているが、まず「プロシューマー」の概念が導入されていることによって、「生産」と「消費」を対立させた関係の中での「与えられる」側としての消費者の立場を脱皮し、生産の側へ、「自らの主張を反映する」ことができるという、積極的、能動的な消費者の位置づけが示されている。そして、情報化社会の進展がそれを可能にしているのである。

「欲求」と「必要性」という一見類似性をもちながらも、本質的には異質である両者に対して、消費者として、いかに対応すべきかという問題、「購入」行動が持つ意味や、消費行動に影響を与えている各種の要因について考えている。また資本の前には社会的弱者でしかあり得ない消費

者の立場を、公的に守るために定められている法的規制について学ぶのもこの段階である。

レベルⅡでは、より具体化した立場から、消費者の立場について考えようとしている。消費者にとって広告が持つ意味やどのように活用すべきか、ものとサービスを購入する上での問題点や、家事作業の社会化の結果としての商品としてのサービスを取り入れることに対するスタンスの問題、消費者主権の立場を貫いた買い物の仕方考え方、あるいは住まいの什器などを日常生活の中で、計画的にメンテナンスするにはどのようにすればよいかなど、家庭生活を営む上での消費者のあり方を具体的な場面を通して学ぼうとしている。その具体性がさらに強くなるのがレベルⅢである。食物や衣服の選択が扱われているが、ここでは、経済性や栄養、好みなどの面からだけでなく、エネルギー・資源・環境などのコンセプトとの関係を配慮した選択が重要になる。さらに家を購入したり、賃貸する上での問題点やエネルギーロスを少なくした住まい方についてもふれている。また、どのような店で、いつ、どのような買い方をするかなど購入方法の比較を取り上げたり、具体的に買い物の練習なども行う。契約と保障、権利と責任などが本来持っている意味など、社会現象として「消費」をとらえる視点も盛り込まれている。

4. 「住まい・家具・設備」領域

表5は、「住まい・家具・設備」領域の内容を基本概念に対応して示したものである。

〈安全性〉

家庭や家庭生活の中で、安全を保つための基本的・一般的な知識及び技術については、レベルⅠにおいて示されている。設備・装備の取扱いについては、全般的に取り上げられており、説明書を読むところから、実際の使用に至るまで考慮されている。

レベルⅡになると、安全に対して、より発展的・専門的に学習することになる。安全な生活を送るためにも、身近な購入物に対して『安全かどうか』を考慮しなければならないことを学習したり、家庭内で使用するカーテン・ソファ・リネン類などの燃焼性について学ぶ。

〈設備と家具〉

レベルⅠ・Ⅱでは「設備と家具」について、レベルⅢでは「家具」のみを取り上げている。その内容は、購入・使用から選択・比較、そして個人のライフスタイルを考慮に入れた選択を扱っている。

レベルⅠでは、一般的なこととして、用具や設備はその目的に合わせて使用すべきであることを学ぶ。特に台所設備やレンジ・電子調理器についてその使用から手入れに至るまで学習する。

レベルⅡでは、身の周りにある様々なものの要素について知識を得るとともに、その知識を選択の材料として使用することを学ぶ。要素というのは、ものの材質・種類・価格・仕組み・所有関係などのことであり、これらの要素を考慮した上での比較分析について学ぶ。

レベルⅢでは、家具に関してレベルⅡにおける選択眼をさらに高めるとともに、個人のライフスタイルにあわせた選択の仕方、また家具の維持・修繕に関する内容が含まれている。

〈居住空間〉

居住空間については、各レベルを通して内容が豊富である。基礎知識からデザイン、そして社会との関係などが含まれている。

レベルⅠでは、人種のるつぼといわれているアメリカらしく異文化・他民族に関する知識、各家族・個人に受け継がれてきたものやルーツについて考え、人間発達や人間関係において互いに尊重し、協調を保つことの大切さを学ぶ。そして、部屋の整備と保管、私的空間・共同空間の違

表5 住まい・家具・設備（20時間）

	基本概念	食物と栄養	人間発達と人間関係	経営とコンシューマリズム	住まい・家具と設備	織物と被服
レベルⅠ	安全性	公衆衛生 大小の設備の使用	仕事の習慣	設備の説明書を 読み使いこなす	家庭	織物と装備
	装備や家具	用具の選択使用	使用の責任	購入	台所装備 用具を個人で手入れする 電子装置 ¹⁾ 家具と小物	装備の使用
	居住空間	共同責任	協調 他の場所や他人のものへの尊重 異文化・他民族 ルーツ ²⁾		部屋の整理と保管 個人の持ち物 私的空間・共同空間洗濯場	
	エネルギー	公共事業 ³⁾ の使用	ライフスタイルにおける棚	経営計画	人と自然的資源	環境調節
	科学技術	リサイクル		資源管理	買い物の流通 リサイクル ホームコンピュータデラシー	リサイクル
	職業				職業の認識	
レベルⅡ	安全性			購入 ⁴⁾	用具 家庭設備	燃焼性
	居住空間	食べ物に関する 準備を整える 場のデザイン ⁵⁾	ライフスタイル	空間を系統立てる 意思決定 ⁶⁾	様式 デザインの基礎 間取り インテリアデザイン	織物と色 色の効果
	装備と家具	用具の選択	所有権VS. ライフスタイル ⁷⁾	家具の比較分析	家具の種類と価格 電子装置	繊維と織物の用途 装備の選択
	省エネルギー	用具と装備の使用			暖房と換気 騒音公害	織物と繊維の効果 ⁸⁾
	科学技術	飲食分析 ⁹⁾ マイクロ波 食べ物の献立計画 レシピのファイル ¹⁰⁾		科学技術明細目録	ホームコンピュータ 娯楽 ¹¹⁾	
	職業				職業の認識	
レベルⅢ	居住空間	食べ物に関する 準備を整える 場のデザイン	活動区域	資金の調達 税金 保険 公共事業 管理費	有効性 所在地 必要性 持家VS.借家 構成 維持と修繕 問題と課題	保管 織物の手入れ
	コミュニティー	レストラン 会食の効果 栄養資源	頼りになる人 ¹²⁾	施設の使用	代理店 商売と産業 教育 健康 親睦会／休養 市民 輸送	衣料施設 ¹³⁾
	家具		ライフスタイル	選択眼 維持と修繕	選択 種類 購入と賃金	選択
	省エネルギー	食物の調理と保存	温度と気候の心理 ¹⁴⁾	活用	家の点検 ¹⁵⁾ 絶縁体の選択 エネルギー源	織物と生地の使用
	科学技術				過去・現在・未来 電子による変革 ¹⁶⁾	
	職業				職業の変革	

1) レンジ、マイクロ波製品

2) 住まいの中で、代々受け継がれたもののアイデンティティー

3) ガス・電気・水道など

4) 安全という価値観を入れての購入

5) キッチンに限らず、食に関する空間のデザイン

6) どのように住まうかや買う・買わない・借りるなどの判断

7) 住宅の所有権の有無がライフスタイルに関係する

8) 寒いときは厚いカーテンを使用したり、遮光効果のあるもので涼しくするなど

9) カロリー計算や食品の分析など

10) ゲーム・カラオケ・CDなど

11) パソコン使用によるデータのファイル化やインターネットを活用したレシピの入手など

12) コミュニティを運営する上でそれを支えている人

13) 不要衣料を交換できる場

14) 心理的に支える効果

15) 無駄をしていないかどうか

16) 電子製品で住まい方が変わるかどうか

いとの関係、個人の持ち物の管理などが取り上げられている。いずれも、コミュニティを保つための個人の責任に関係している。

レベルⅡでは、居住空間における物理的様式について取り上げられている。ライフスタイルや目的に応じた場のデザインを演出するために、デザインの基礎、空間を系統立てること、色の効果、買う・買わない、借りるなどの意思決定に関する内容が含まれる。

レベルⅢでは、居住空間の枠とその意味を広げ、持ち家か借家かと言う所有の問題、住まいの維持・修繕という住居の枠組みについて扱っている。また、居住空間維持のための資金の調達・税金・保険などの内容を含む。

〈エネルギー・省エネルギー〉

レベルⅠでは、「エネルギー」、レベルⅡ・Ⅲでは「省エネルギー」と変化している。内容については、レベルⅠでは、一般的な知識として、エネルギーは自然資源であり、ガス・水道・電気などの公益事業として活用しており、私達の環境調節を行っていることを学ぶ。レベルⅡでは、エネルギーに関する問題と省エネルギー対策を含んでいる。内容は暖房による空気汚染と、換気によるエネルギーロスという相矛盾する問題、省エネを考慮した調理機器の使用、家庭用電気機器が発する音が騒音公害となっている現状を示している。また、寒いときは厚いカーテンを使用したり、ウール製のものを着たり、汗をかく季節には麻・綿など吸水性のよいものを着るという工夫により、省エネルギーに貢献できる策を示している。

レベルⅢでは、エネルギーを無駄にしないための知識や活用法、点検について検討している。食物の調理の工夫や保存、温度や気候が心理に与える効果、断熱体、織物や生地についての知識を得ることで省エネルギーに貢献できることやエネルギーの無駄をしていないかどうかの観点からの家の点検法を含んでいる。

〈科学技術〉

ここでは、リサイクルや電子製品、コンピューター活用について、各レベルを通して発展的に取り扱っている。レベルⅠでは、リサイクルに関する知識とともに、コンピューターの活用法について学習する。

レベルⅡでは、コンピューターを活用したカロリー計算、レシピのファイル化、献立計画、家計管理などの使用法や、ゲーム・カラオケ・CDなどの娯楽製品について含んでいる。レベルⅢでは、電子製品によって今後生活が変化していくことを示唆している。そして、科学技術による生活の変化の流れを見通し、未来を見つめる目を養う方向にある。

〈職業〉

ここでは、住まいや家具と設備に関連する職業にどのようなものがあるかに対する認識を持たせたり、住まう人や使う人の立場に立って考える時どのように発展させていけば良いかを検討しようとしている。

レベルⅠ・Ⅱでは、「職業の認識」、レベルⅢでは、「職業への発展」として取り上げられている。

〈コミュニティー〉

レベルⅠ・Ⅱにはなく、レベルⅢのみに取り上げられている基本概念である。コミュニケーションをはかる場として、市民生活にはレストランやリサイクル施設があり、会社には代理店、それぞれをつなぐ輸送という手段もある。また、教育・健康・親睦／休養などもコミュニティーには重要な要素である。また、地域の食料資源の適正な配分や確保など、個人や一家族の食料需給の

問題を越えて、コミュニティー全体の問題として、さらにはグローバルな問題としてとらえる視点を与えている。また、コミュニティー施設の使用・運営上の問題点や、その運営において重要な役割を果たす人材の資源としての人間像について考える機会を与えている。

『住まい・家具・設備』における到達点は、最終的に『コミュニティー』という言葉に集約されるであろう。

5. 「織物と被服」領域

表6は、「織物と被服」領域の内容を基本概念に対応して示したものである。

〈安全性〉

まず、〈安全性〉の概念が、各レベルともに最重要概念とされている。

レベルⅠでは、織物を使用している家具や装備の安全な使用法や管理、並びに被服管理や被服製作に関する設備の安全性や管理の方法について学ぶ。レベルⅡ・Ⅲでは、その設備や用具の実際の使用方法について学習する。具体的には、被服製作の技術を上達させる裁縫用具の安全な使い方や、アイロン、ミシンの他、洗濯機、乾燥機などの安全性に配慮した使用方法を学ぶ。

〈選択と手入れ〉 〈被服管理〉

レベルⅠでは、「何を選んで着る（使用する）か」を考える時点で「手入れ」の要素との関連を含めて考えさせ、レベルⅡでは被服管理上の問題について多面的にとらえようとしている。

まず、レベルⅠでは我々は自己表現の手段として自分が選んだ被服を着用していることや、服装を通してその人を理解しようとしている我々の日常の服装のあり方が自己概念の形成に影響を与えていることなど、服装と人間形成や人間関係との関連、服装の働きについて学ぶ。また、我々が衣服を欲しいと思う時、それは必ずしも必要であるからではない。欲求と必要性は、異質のものであり、その両者の関係をどの様に調整した上で衣服購入に臨むかということは重要な問題である。これらの本質的な問題をふまえると同時にメンテナンス上の実用的な視点を含めて被服や家具・設備関係の繊維製品を選ぶことを学ぶ。そして、ここではメンテナンスの実際についても学ぶ。

レベルⅡの「被服管理」では、衣類の自己管理を家族メンバーが各自行うことで、互いの責任関係が確立されるという人間形成への影響について学ぶことや例えばクリーニングなど被服を管理する上でのトラブルが生じた時に消費者保護が法的にどの様に行われることになっているかや、生産側から消費者への情報伝達の手段となって衣類についているラベルについて学んだり、社会と衣生活との接点における問題点を学ぶ。また、保管やメンテナンスの実践的学習もある。

〈被服〉

これはレベルⅢのみに挙げられている概念である。ここでは、ファッションからどのようなイメージを受けるか、それが人間関係に与える影響、個人評価に働く服装の影響など、衣服と人的要素との関係について学んだり、服装の表出効果の基本となるデザインの基礎学習をする。また、極端な環境下で着用されたり、着用して激しい動きや運動した時の被服や特殊な身体的条件を有した着用者の被服などについて知ること、被服とは何かということの意味を学ぶことができる。

〈基本的構成〉 〈構成〉 〈被服構成〉

実際に被服製作を行い、その中で技術を身につけていくようになっている。

レベルⅠでの基本概念は、〈基本的構成〉である。まず自尊心を汚さないための好ましい身だ

表6 織物と被服(25時間)

	基本概念	食物と栄養	人間発達と人間関係	経営とコンシューマリズム	住まい・家具と設備	織物と被服
レベルⅠ	安全性				設備の使用と管理	設備
	選択と手入れ ¹⁾		自己概念 自己表現	要求と必要 ²⁾ メンテナンス	メンテナンス 自己表現	メンテナンス 分類 裁縫と修繕
	基本的構成		自尊心	時間管理 消費者技能 説明書の指示 ³⁾ 技能		ミシンと設備 型紙と説明書 生地と小間物 ⁴⁾
	職業					認識
レベルⅡ	安全性					用具の使用
	コンシューマリズム		自尊心	予算 財源 意思決定		計画 購買 被服の選択
	被服管理		責任 ⁵⁾	消費者保護規定 ラベル		メンテナンス 保管
	織物				家の造作 メンテナンスと管理	分類と修繕 仕上げ ⁶⁾
	構成				技術 ⁷⁾	設備 型紙と生地の選択 技術 補正
レベルⅢ	安全性					用具の使用
	職業		ライフスタイル ⁸⁾			個々の服装 選択
	被服		ファッションイメージ 個人評価			デザインの基礎 着用者への配慮 ⁹⁾
	織物	繊維の安全性 ¹⁰⁾		生地の選択	デザインの基礎 メンテナンス 品質	デザイン 構造 織物 編物 繊維の組成 仕上げ 安全基準
	コンシューマリズム		必要と欲求	購入と修繕 意思決定 市場の選択 消費者の償還請求 ¹¹⁾ 予算		流行とファッション ¹²⁾ デザイナー ¹³⁾ 衣装の基礎 ¹⁴⁾ 衣服のリサイクル
	被服構成					進歩的技術 ¹⁵⁾

- 1) 織物と被服に関する実用的な意味でのこと
- 2) 織物と被服に関する実用的な意味でのこと
- 3) 説明書などに書かれている指示を読み取る力をつける
- 4) 小間物とはボタン・針・リボンなどのこと
- 5) 自分の物は自分で管理しようとする責任感を育てる
- 6) 仕上げ加工について(染色・起毛など)
- 7) カーテン・クッション・テーブルセットなどの住まいに関する作品を製作する技術
- 8) ライフスタイル・職業にあった服、T.P.O.に応じた服を選ぶ力をつける。被服にあらわれたライフスタイルがその人の人間性や個性、生き方に大きく関与する
- 9) 例えばコンダクターのスーツ(指揮者は激しい運動をするが、整った服装でなければならない)やウエットスーツの場合。あるいは障害者の服装など
- 10) 繊維の難燃性についてなど。難燃性繊維を使ったエプロンやナプキン、鍋つかみなど
- 11) 権利保証について。例えば、クリーニングの際に起こったトラブルの解消法やクーリングオフについてなど
- 12) 流行とは一時的なもので、おもしろい奇抜な個性を重視した服装のことで短期的。ファッションは、雑誌や店頭などで見られるもので一般的な服装のこと
- 13) デザイナーとしてどのような人が存在するのか。デザイナーによる服の特徴を知る。職業としてのデザイナーの存在を知る
- 14) 衣装の揃え方について。基本的なアイテムはどんなものか。どんなものを揃えればよいか
- 15) 公共的な、社会の中での進んだ技術のこと。既製服や流通について

しなみについて認識させる。消費者として身につけておくべき技能や被服製作の説明書などの指示を理解して、それに従うことができる技能を身につける。そして生地の種類や、被服製作をする際に使用するミシンや裁縫用具の種類と使い方を学ぶ。また、型紙の使い方についても学習する。

レベルⅡでは、実際に製作技術を身につける。まず、被服を製作する際の型紙や生地の選択の基準について学ぶ。そして補正の方法について学ぶ。“型紙”の記載があるが、アメリカではパターンを利用しての合理的な製作が中心となり、製図からの指導はあまりされていない。住まい、家具や設備に関する技術では、実際には、カーテン、テーブルセットなどを製作する。

レベルⅢでは、自分で製作する服に関する技術と比べて既製服や流通を取り上げ学ぶ。

〈コンシューマリズム〉

レベルⅡからレベルⅢにかけて、発展的に広がりを見せている。

レベルⅡでは消費者として自分で納得でき、満足する服装を身につけることは、各自の精神的発達にも影響を与えることになり自分に対する誇り、すなわち自尊心を育てることにもなる。また、予算や財源に合わせて被服を購入したり衣生活の運営を行うことや、衣生活における意思決定のあり方について学んだり、服装計画や被服の購買に関する問題点、被服の選択の仕方など実地的な問題についても学ぶ。

レベルⅢでは、服装に対する欲求と必要性とを区別して考えるという根源的な問題を扱うと同時に消費者が抱える現代的問題も取り上げている。例えば「購入と修繕」では買うことからスタートする使い捨てタイプの衣生活への吟味が求められている。衣類を購入するに当たっては、どのような考え方で何を選ぶかという意思決定に関する問題、被服費の問題、衣料の購入先を決めるためにはタイプ別に流通のシステムと特徴を知った上で適切に使い分ける能力が必要となること、購入、着用や手入れの過程で生じたトラブルに対して消費者の権利がどのように保証されているのかなども学習内容とされている。

さらに衣服は実用品でありながらも、対人、対社会的な要素が大きいことを考えるなら、我々が“着装する”ことの意味やその基本的事項に対する理解や日常的に我々が有形無形に影響を受けている流行やファッションとは何かとか、その方向に大きい影響力を持っているデザイナーの存在についても考えようとしている。このように、現実的・日常的な衣服を取り巻く状況との関わりの中で「着ること」の問題を学ばせようとする姿勢が見える。また、この姿勢は「資源」「環境」などのキーワードとの接点も大切にし、それが「衣服のリサイクル」の学習内容に示されている。

〈織物〉

レベルⅡでは、織物の種類や分類について、染色や起毛など、仕上げ加工について、どのような商品が市場に出ているのかを、商品学の立場から学ぶ。

レベルⅢにおいてもレベルⅡと同じく商品学の立場から、エプロンや鍋つかみなどの難燃性の繊維の安全性や、布についてのその構造、繊維の組成、仕上げ加工などについて学ぶ。さらに、テキスタイルデザインについて知ることや燃焼性、皮膚障害などの広い布の安全基準についても学ぶ。

また住まいに使われている布の品質・用途や手入れに合った選び方などについても取り上げている。

表7 本質的目標と各領域における基本概念（レベルⅠ）

概 念		本 質 的 目 標											他 へ の 理 解
		コ ミ ュ ニ ケー ション 技 能	数 学	科 学 及 び 技 術	市 民 と し て の 素 養	芸 術 と 人 間 性	分 析 的 思 考	家 族 の 生 活	仕 事	健 康	環 境	自 己 尊 重	
1. 食物と栄養													
栄 養		×		×	×		×	×		×		×	×
調 理		×	×	×			×		×	×	×	×	×
コンシューマリズム		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
食 事		×						×	×			×	×
安 全 性				×	×			×		×	×		
2. 人間発達と人間関係													
自 己 概 念								×		×		×	
関 係		×						×			×		×
意 思 決 定							×	×				×	
コミュニケーション		×						×					
子 ど も の 発 達								×		×			×
職 業								×	×				
3. 経営とコンシューマリズム													
資 源							×	×	×				
意 思 決 定							×	×			×	×	
コンシューマリズム			×				×	×					
4. 住まい・家具・設備													
安 全 性		×					×			×			
装 備 や 家 具			×	×		×	×	×			×		×
居 住 空 間		×	×			×		×			×		
エ ネ ル ギ ー				×			×	×			×		
科 学 技 術		×	×	×			×		×				
職 業		×	×	×	×		×		×				
5. 織物と被服													
安 全 性										×			
選 択 と 手 入 れ		×					×					×	
基 本 的 構 成		×	×				×		×	×		×	
職 業									×				

表9 本質的目標と各領域における基本概念（レベルⅢ）

概 念		本 質 的 目 標											
		コ ミュ ニ ケー ション 技 能	数 学	科学 及び 技術	市民 としての 素養	芸術 と人間 性	分析 的 思考	家族 の 生活	仕 事	健 康	環 境	自己 尊 重	他 への 理 解
1. 食物と栄養													
栄 養		×		×	×		×	×		×	×	×	×
調 理		×	×	×		×	×	×	×	×	×	×	×
コ ン シ ュ ー マ リ ズ ム		×	×	×	×		×	×		×	×	×	×
安 全 性										×			
2. 人間発達と人間関係													
意 思 決 定							×	×			×		
関 係		×						×			×		×
親 になる こと		×			×			×			×		×
コ ミュ ニ ケー ション		×						×					
子 ども の 発 達		×	×	×	×	×		×		×			
職 業								×	×				
自 己 概 念								×				×	
3. 経営とコンシューマリズム													
資 源							×	×	×		×	×	×
意 思 決 定		×	×		×		×	×	×	×	×	×	×
コ ン シ ュ ー マ リ ズ ム		×			×		×	×	×	×	×	×	×
4. 住まい・家具・設備													
居 住 空 間		×	×			×	×	×			×	×	×
コ ミュ ニ テ ィ		×			×		×	×		×	×		×
家 具			×	×		×	×	×		×			×
省 エ ネ ル ギ ー			×	×			×			×			
科 学 技 術		×	×	×			×						
職 業		×							×				
5. 織物と被服													
安 全 性				×	×		×	×	×	×	×	×	×
職 業				×	×	×	×		×			×	
被 服		×		×		×	×	×	×	×	×	×	×
織 物		×	×	×	×	×	×	×	×	×		×	
コ ン シ ュ ー マ リ ズ ム		×	×		×	×	×	×	×		×	×	×
被 服 構 成		×				×	×	×	×	×		×	×

5. 基本概念と本質的目標

教科内容の検討をする時、しかるべき内容の家庭科を学んだ結果、子どもにどのような力を育成できるかということが問題になる。家庭科という教科が、子どもの人間形成のどの部分に寄与することができるかという関心である。

上で見てきたような基本概念を押さえたプランで家庭科教育を行った結果、どのような教育目標を達成することができるかを示したものが表7～表9である。家庭科の基本概念がどのような教育の本質的目標（コミュニケーション技術、数学、科学および技術、市民としての素養、芸術と人間性、分析的思考、家族の生活、仕事、健康、環境、自己尊重、他への理解の12項目）の達成に対応しているかについて、レベル別に示したものである。自己を中心にするものや基礎的要素の強い目標への関心が強いレベルから、レベルが進むに連れて関係性が強い項目や発展的な要素の強い目標への寄与が強くなる傾向がみられる。ここに示されている項目を単純に数量的に見ると、「家族の生活」・「分析的思考」・「コミュニケーションの技能」・「自己尊重」・「他への理解」など自分も含めて人間理解に関係が深い目標項目の達成に関する概念がもっとも多い。「芸術と人間」・「市民としての素養」などは、数量的に見る限りでは関係が低い目標となっている。

関係の詳細については、裏付けとなる資料などと併せて検討しなければ不明な点が多く、断定的な議論はできない。しかし、各教科の内容を教育の本質的目標に照合して、検討・整理する方法からは、学ぶ点が多いことを付記しておきたい。

6. おわりに

ペンシルバニア案の訳出及び内容の検討を通して得ることのできた諸点について示す。

1. 基本概念によって指導計画を提示する方法の有効性は、学習者に応じた指導計画を立案したり、教育の本質的目標に教科の指導内容を対応させる時、明快である。

2. 当プランの内容的に評価すべき点については、人間理解や自分自身の理解を根底に置き、常に「自分にとってどのようにあるべきか」を問いかけるところからスタートしていることである。この基本姿勢が、「自分にとっての地域社会」であり「自分にとっての地球」であるという認識を育てることになるであろう。また、日常的生活への関連を重視して、具体的・分析的にとらえることを重視している一方で、生活様式・ライフスタイルなど生き方にも目を向けている点は、学ぶ点が多い。

最後に、当資料の訳出に参加された光田幸美氏に感謝申し上げます。

注

1) 加地芳子「家庭科教育論」 p122, 東信堂, 1988

2) D.Thornburgh, Carolyn M. Krax "Scope and Sequence Home Economics Education" Pennsylvania Department of Education, 1984